

悩まなくてもだいじょうぶ



知っておきたい アレルギーの話

NPO法人アレルギーを考える母の会
代表 園部まり子



イラスト／清水直子

第2回

食物アレルギーの子を支えよう

お母さんから、

泣くような声の「SOS」

食物アレルギーでは、まれに大変に重い症状を引き起こす人がいます。

数年前のこと、食物アレルギーのお子さんを保育園に預けて働いているお母さんから、「保育園から今、『カステラをひとつだけ食べた途端に全身にじん麻疹が広がり、顔も真っ赤、肩で息をしている。苦しそうなので、すぐ保育園に来るように』と職場に連絡があった。保育園まで30分以上かかる。どうしたらいいか」と泣くような声で電話がありました。アナフィラキシー症状と判断してすぐに保育園に電話。送る園を必死に説得して救急車の要請にこぎつけ、何とか事なきを得ました。アナフィラキ

シー症状はさらに進むとショック状態になり、血圧が下がって意識を失ってしまつなど、命の危険に及ぶこともある重い症状なのです。

この事故は、「3歳になつたし卵も少しずつ食べさせるように」という一般論にすぎない医師の指導に戸惑つ保護者に代わり、保育園が食べさせてしまったために起きました。そうでなくても、アレルギーとなる食物を間違つて食べてしまった、調理器具に付着して混入してしまつたなどという事故はしばしば起きています。食物アレルギーの子のお母さんに、「心休まる時はありません。

患者を守る

安全網も着実に広がる

一方で、「いざ」に備える取り組

みも始まっています。2005年の春から、安全キャップを外して太ももに押し当てると針が飛び出し薬液が注射される救命用の自己注射「エピペン」が処方されるようになりました。

当初は本人と家族だけが打てることされていましたが、昨年春にまとめられた「学校のアレルギー疾患に対する取り組みガイドライン」では、自分では注射できない状態にある児童・生徒に代わって教職員が打つことができるようになりました。さらに今年3月からは、病院に向かう前に行なう「病院前救護」として、患者が持っている「エピペン」を救急救命士が打てるようにもなりました。食物アレルギー患者を社会で守る安全網も着実に広がっています。



そのべ・まりこ ●神奈川県社会福祉協議会セルフヘルプ支援事業運営委員。困っている患者と専門医との橋渡しを第一に「治療ガイドライン」情報などの提供、専門医による講演会や会報発行、行政への働きかけを行なっている。共著に『食物アレルギーの手びき 改訂第2版』（南江堂刊）。